

# 予科練



No.461 令和2年

11・12月号

- 連載《シリーズ海軍及び予科練各種記念碑・慰霊碑》No.3… 2
- 連載《シリーズ海軍飛行予科練習生遺稿》…………… 3
- 三四三空隊史③…………… 4
- ご縁…………… 8
- 青春の日々…………… 13
- 私の昭和史③…………… 18
- 寄付者芳名簿…………… 23

公益  
財団法人

海原会

海軍航空隊予科練  
予科練航空隊を創設して、昭和17年8月1日に開隊され、土空に在隊中の甲10期、乙16・17  
科練航空隊を創設して、昭和17年8月1日に開隊され、土空に在隊中の甲10期、乙16・17

海軍に

はつおほそらに

散華せし

さみら声なく

いく春やへし

わろ

# 高松宮妃殿下御歌

霞ヶ浦に立ちて海軍飛行  
予科練習生を偲びてよめる

海はらに

はたおほそらに

散華せし

さみら声なく

いく春やへし

この御歌は、高松宮喜久子妃殿下  
の御直筆で、有栖川流と申しあげ、  
妃殿下はその御宗家にあたられると  
承ります。

## 海軍及び予科練各種記念碑・慰霊碑 予科練の碑 No.3



予科練発祥の教育航空隊、横須賀空が手狭になり土浦空に移転して、拡充を図った筈の予  
科練教育隊も、極東に暗雲が立ち始めた昭和12年頃には、搭乗員の拡充が求められて土浦空  
に匹敵する航空隊の設置が急がれて、三重県香良洲町に40万坪の用地を買収して、第2の予  
科練航空隊を創設して、昭和17年8月1日に開隊され、土空に在隊中の甲10期、乙16・17  
(岩国)・18期生が転隊して、その開隊記念式典に花を添えた。昭和17年末迄に最初から三  
重空に入隊したのは、甲11期乙19期の約半数の練習生が入隊した。「東の土空・西の三重  
空」と言われて、予科練教育の両  
横綱とされ、甲は土空乙は三重空  
と教育も分断させての思惑から創  
設されたが、戦況の悪化に伴って  
予断を許さず混合されて、予科練  
のみで無く予備学生・生徒等の搭  
乗員教育の根幹が両隊に求められ  
て、基礎教育が施された。

三重空には前述した各期以外に  
20期の一部も土空から転隊して、  
乙飛では21期、24期迄の練習生と、  
丙飛15期、特乙飛では3・5期ま  
でが、又、予備学生では13・14期  
生達と一部甲飛の練習生達も教育  
期間の長短は別として三重空並び  
に分遣隊で教育された。

三重空には奈良、高野山等に分  
遣隊が創設されていて、18年以降  
の練習生は主にこの両隊に入隊し  
た。

戦後航空隊時の射撃場跡地に現  
在、「写真の慰霊碑」が在隊生存  
者等の浄財で建立され、五月末の  
日曜日に慰霊祭が行われている。

所在地 三重県一志郡香良洲町

# 海軍飛行豫科練習生

遺書 遺詠 遺稿 辞世

## 書簡

(弟あて)

六〇一空所属  
海軍一等飛行兵曹

今井

勲

十八歳  
千葉県

第十二期甲種飛行予科練習生

雄夫、いよいよ暑くなったね。お前もこの位の暑さには負けず、大いに勉強している

ことと信ずる。

戦争には休みはない。お前の勉強にも、休みがあつてはならぬ。

勿論、俺も勉強している。幾度もいうのであるが、父母の意にそうように、一生懸命にやれ。

昭和二十年八月十三日金華山沖に来襲の敵機動部隊攻撃に、神風特別攻撃隊第四御楯隊として、彗星艦爆に爆装50番を抱き、一三〇〇百里原基地を発進して、敵艦船に突入戦死す。

## 三四三空隊史③

志賀 淑雄 飛行長

ここに初代隊長すべてを失う。  
正に死闘の連続であった。

かくて隊長は新に着任した天誅組光大尉一人となったが山田、松村、市村各分隊長は編成以来の歴戦であり、老練磯崎分隊長、新鋭速水、服部分隊長を加えて意気ますます軒高であった。

一方、乏しい器材燃料を駆使して古賀整備主任の下で品川、成松、辻野、小林各整備分隊長、二宮兵器分隊長以下地上各隊員の一人一人がそれぞれ分散隔離された壕、掩体あるいは露天引込線のなかで、情報等も充分に伝えられないままの姿で不撓不屈の努力を続けていた。

この姿は、一月松山における初編成以来、五月大村で新副長相良中佐、新天誅組隊長林啓次郎大尉以下を迎えての背水の布陣への再編、そして今や駕瀨大尉以下初代三隊長を失い、窮まり行く戦況に向って正に最後の

力を振り絞ろうとする第二の再編の姿でもあった。

八月八日、戦爆連合約二百余機が天草上空から侵入して来た。邀え撃つ紫電改は光本隊長を指揮官とする二十四機。しかも一連の被爆の後で今までのような一斉離陸はできなくなっていた。〇七三〇光本中隊(四〇七)、続いて二中隊(三〇一)が発進し、やや遅れて三中隊(七〇一)も発進して有明湾上空に向った。遭遇した敵の第一群はB-24十二機編隊の四梯団と、それを掩護するP-47、P-51合わせて約四十機と報告された。

第一撃以降乱戦となり、有明湾上空から久留米へ、そこから福岡及び築城方面へと敵を追って分散北上する形となり、北九州に向った我が一群はそこで別のB-29とこれを掩護するP-47、P-51にも会敵している。新手の伍間増加に対する訓練の不足と、余りにも数的に隔絶した邀撃であるために漸次主導権を失った戦のなかで、各機は闘志正に火玉の如く遮二無二突込んだ模様である。

歴戦石塚光夫少尉も未帰還のまま終戦を迎えたなかの一人であるが、その奮闘の姿は地上から目撃され、感激した地元の人達が三加和町(熊本県益城郡)山中に自爆機を搜索された様子が、戦後戦友の努力によって解明されている。

久多見上飛曹は空戦中エンジンに被弾、落下傘降下中P-47四機の銃弾で戦死し、その四番機西本二飛曹は福岡市味方村の水田中に自爆、久世二飛曹は福岡上空で終に被弾して飯塚市鯉田炭鉱に自爆している。田浦益本上飛曹もそれぞれ未帰還となっている。

後発の三中隊横堀上飛曹は最後に築城基地上空でP-51十二機と空戦し自爆している。

〇八五〇離陸した須崎重雄上飛曹は、一〇〇〇太宰府上空にB-29の編隊二十機を発見、その一機に左前方から体当りを敢行して同町北谷に墜落する一部始終を地上から目撃された。一方火焰を吐きながら高度を下げていったB-29は壱岐島東方の海上に墜落したことを西部

軍から通報され、司令から二階級特進を上申された。

三中隊油田二飛曹は有明海上空でB-24を一機撃墜したが、単機となったため大村に向う途中多々良上空でP-47型三機と空戦し被弾落下傘降下した。

地上で飛行長は敵の降下と見て直ちに搜索捕獲を指令したが、山上指揮所の相生副長から「味方だよ」との電話があった。「イヤ敵だよ」と思いつめていた飛行長の所に「重症でした」(間もなく死亡)と帰隊報告を受けた時、名状し難い感慨の裡に「何年経っても先輩には叶わないな」という溜息があった。

一中隊服部大尉は福岡上空でB-29を攻撃中に被弾、重症のまま白木村山中に降下したところを救助されて陸軍病院に収容された。

隻腕を失ったまま意識不明を続けていたが、八月十六日になつて通報を受けた大村基地から中島少尉が、翌日野村軍医長が収容に向い、十九日嬉野海軍病院に移して帰隊した。

敵の攻撃は九州全域に及んだ。



殊に北九州に來襲したB—29は支那大陸からのものと考えられる情勢であった。

## 七、終戦

八月九日、燃料機材共に乏しく、飛行長、隊長、分隊長は搭乗員と一緒に大村の裏山に登山することになった。

山腹で誰かが「落下傘！」と叫んで指さす方向、大村湾を距てた山の向うに突然頬に温味を感じるかの大な閃光に続いてムクムクと雲を突いて上昇するキノコを見る。

広島被爆の電信情報から異口同音に原爆と判断して下山を急いだ。肌に感ずる事態は正に重大であった。

いずれ空母群に一撃をと、飛行長指揮の下に総飛行訓練を実施し、その間八月十二日長崎上空の邀撃で大塩大尉を失ったのを最後として八月十五日終戦の大詔を拝し、万事ここに窮った。如何なる事態にも泰然として司令を補佐された相生副長は、この日たまたま松山基地に到着の寸前であった。司令は十六日、

紫電改を駆って五航艦司令部へ飛ばれ、松村大尉、本田飛曹長、下鶴上飛曹が掩護随同行した。

司令はさらに横空に、そして松山を経て十九日大村に帰着された。その間飛行長は秘かに拳銃に実弾を装填して留守をあずかったが、一同整々と待機していた。

十九日、切々たる司令訓示の後、五航艦隊司令部の指示に従って血気旺んな搭乗員、現役隊員から大村を離れることになり、主計長、鈴木副官外の要員を残して全員それなりに万感を残して逐次散っていった。

その後ラジオ放送によって飛行長以下若干名が着隊し、三三二空司令山田竜人中佐の下に進駐軍との折衝引渡しに当り、九月末米軍の指示によって近藤若重整備兵曹外の整備により飛行長、小野正盛、的場三郎、原田秀夫等が試飛行を行い、紫電改三機を横須賀に空輸した。この三機は米国に移されて今日に至っている。

## 〈隊史後記〉

戦後三十五年を経て綴る隊史に間違いがあつてはならないという観点から、防衛庁戦史室に残っているごく一部の戦闘詳報と、副官部で作製され司令が保存された「戦死病歿行方不明者事務進捗綴」に記載された記録を基にして、事実上添って八ヶ月間の動静を連ね、要約したものが本稿である。

靖国の社殿に祀られる英霊に序列はなく、水の如く平等であることを思い、加えて敗戦、銃後の惨を考えると、隊史も個人名抜きで詳述出来ればと念じたのであるが、前述の次第で個人名を連ねることとなった。がこれは、その人だけを顕彰するのではなく、山の話をする時に尾根の名、谷の名を連ねて語るように話のなかの一つの道標として考えていただきたい。

構成上、記述に濃淡が出来たことも否めない。戦闘の模様については、旗色必ずしも振わず終戦に近づいた頃については、当時の混乱等を意識して特に濃くしたことをお断りしておく。なお、整備、工作、主計、医務

各科員の誠にきめ細かい連日の努力は言語に絶するものがあつた。その撓まぬ健闘があつてこそこれだけの実績を挙げることが出来たのであるが、そのことを充分に表現しえなかつたことをお詫びする次第である。

総撃墜数百七拾余機に及んだ赫々たる戦果の裏に多数の殉職、地上戦死及び病死者を出したことは別表の通りであるが、その都度看護し処理し、遺体遺骨の処理をした医務科、主計科、さらに戦後も複雑な事務処理を完済し貴重な資料を残した副官部の実績をここにお伝えする次第である。

次に戦闘について一言補足させていただく。

鴛淵、林、菅野初代隊長によって実施された美事な編隊戦闘は、これに続いた老若搭乗員のひたむきな闘志によって完成されたものであり、後を受けた林啓次郎隊長、光本卓雄隊長もいづれ劣らぬ名隊長であつたし、分隊長、分隊士、各搭乗員ともにそれぞれ一機当千の闘志に燃えていたことを想起する。それ

は三四三空だけでなく各隊とも同様であった。

そのことは同時に、空に一身を捧げた海軍戦闘機搭乗員のなかで、たまたま最後の機会に二十耗四挺の紫電改で戦う機会を与えられたことに對して、我々隊員一同心から敬虔な態度で感謝することを忘れてはならない。

紫電改もまた一日で出来たものではない。これを搖籃した海軍関係の用兵、技術の各先輩に感謝するとともに、隊員一同あるいは足らざりしを愛えつつ、最後に、戦死者ならびに銃後にあつて被弾その他により悲惨な昇天をされた方々に対し、心かなる黙禱を捧げる。

## 部隊編成・配備経過

### 並びに主要戦闘経過

#### 一 部隊編成経過

一九・一二・二五 編成。三航艦に編入。戦闘三〇一、四〇七、七〇一の三ヶ飛行隊  
二〇・二・一 偵四増隊

二〇・二・一〇 戦闘四〇一、四〇二増隊

二〇・三・一 戦闘四〇二減隊  
二〇・四・一 五航艦に編入  
二〇・六・一 七二航戦に編入

#### 二 部隊配備経過

一九・一二・二五 松山基地にて編成（戦闘四〇七のみ即日出水基地派遣）  
二〇・一・五 戦闘四〇七出水

より松山に合同  
二〇・三・一 戦闘四〇一徳島

基地派遣発令  
二〇・四・四 司令部の一部を

率い鹿屋進出  
二〇・四・一〇 戦闘三〇一鹿

屋進出  
二〇・四・二三 戦闘四〇七鹿

屋進出  
二〇・四・一四 戦闘七〇一鹿

屋進出  
二〇・四・一七 戦闘三〇一、

四〇七、七〇一の主力を率い第一

一國分基地に転進  
二〇・四・二五 戦闘三〇一、

四〇七、七〇一松山基地復帰  
二〇・四・三〇 戦闘三〇一、

四〇七、七〇一を率い大村に転進。戦闘四〇一を松山に復し、これを訓練・補給基地とする。

二〇・八・一五 終戦の大詔を拝す  
二〇・八・一九 待機を止め兵器を還納

#### 三 部隊戦闘経過

##### イ 一般経過

制空権獲得による戦局打開の特殊部隊として二〇年初頭に編成を終わり、五月進出を目標として四國松山基地において、内海西部の防空をかね訓練中のところ、三月十九日、敵機動部隊が内海西部に攻撃してきたるを邀撃、五〇数機を撃墜するといふ戦果を収めた。

続いて鋭意訓練中であつたが、三月末敵は沖繩に侵攻、戦局もはや予定の訓練続行を許さぬ事態となり、各隊とも練度半ばのまま、四月上旬から逐次鹿屋に進出、南西諸島方面の制空に任じた。喜界島付近上空にF6F、F4Uを捕捉し、激戦数次にお

よびかなりの戦果を収めたが、鹿屋の基地設備不良のため地上で飛行機隊を危殆にさらすことしばしばであつたので、四月中旬第一國分基地に転進し、任務を続行した。

この頃、マリアナ基地より南九州に對する大型機の来襲漸く頻繁化し、その効果軽視できぬ状態に至つたので、四月末再度基地を大村に転進し、五月初頭よりサイパン、沖繩方面からの敵大・中・小型機の来攻に對する自主的攻撃作戦を開始する。かたわら、九州西方海面に出没する敵哨戒機の掃蕩戦を実施した。

七月に入るや、敵各種機による九州に對する空襲が頻繁化し、これと對峙する我方の目標はB125、B124、P147、P151、P138、F4U、F6F及びB129と急激に増大したが、保有燃料制限のため、戦闘飛行にも制約を受けつつ、また不備な基地築城のなかにありながらも万策をつくして被爆に對処しつつ、本土決戦に備えて士氣衝天、原子爆弾の使用に遭つても敵愾心ますます熾

烈であつたが、八月十五日突如終戦の大詔を拝するに至つた。

この間飛行機隊は、随所に行動してしばしば敵の心胆を寒からしめ、敵機撃墜数一七〇機に及び、御嘉賞を拝し、また感状を授与される等、武勲顕著なるものがあつたが、各戦闘飛行隊長海軍大尉鴛渕孝、林喜重、林啓次郎、菅野直、それに各分隊長松崎国雄、嶋孝三、井上伊三郎、木下一周等、善戦連闘ついに戦死し、外搭乗員七〇名を失つた。

## 口 主要戦闘

- ① 三月一九日 機動部隊邀撃（松山）使用兵力一紫電、紫電改五四機、彩雲三機、戦果一撃墜F6F・F4U三機、SB2C四機計五七機（内F4U機は地上銃火による）被害一未帰還・自爆一三機（内一機は彩雲）本戦闘に対し連合艦隊長官より感状を授与さる
- ② 四月一二日 喜界島制空（鹿屋）使用兵力一紫電改三二機 戦果一撃墜F4U

二〇機 被害一未帰還一〇機

- ③ 四月一五日 鹿屋上空邀撃（鹿屋）使用兵力一紫電改二機 戦果一なし 被害一自爆二機
- ④ 四月一六日 喜界島制空（鹿屋）使用兵力一紫電改三二機 戦果一F6F・F4U二〇機 被害一自爆・未帰還九機
- ⑤ 四月一八・二五日 南九州上空におけるB129邀撃（第一国分）使用兵力一不明 戦果一B129三機 被害一未帰還二機、大破（戦傷）二機、基地被爆による炎上・大破約一五機
- ⑥ 五月四日 喜界島制空（大村）使用兵力一紫電改三六機 戦果一撃墜F6F、F4U一三機 被害一未帰還六機
- ⑦ 五月四・一一日 北九州方面B129邀撃（大村）使用兵力一紫電改約六〇機 戦果一B129九機 被害一自爆（空中分解）一機
- ⑧ 五月四日・六月下旬 九州

西海方面哨戒機掃蕩（大村）使用兵力一各回紫電改八・一二機 戦果一撃墜PB4P一機 被害一未帰還六機

- ⑨ 六月二日 南九州艦載機邀撃（大村）使用兵力一紫電改二七機 戦果一撃墜F4U八機 被害一未帰還二機
- ⑩ 六月二二日 喜界島制空（大村）使用兵力一紫電改三一機 戦果一撃墜F4U三機 被害一未帰還四機
- ⑪ 七月二日 南九州小型機邀撃（大村）使用兵力一不明 戦果一不明 被害一未帰還三機
- ⑫ 七月五日 北九州哨戒（大村）使用兵力一紫電改八機 戦果一撃墜P151一機 被害一未帰還三機
- ⑬ 七月二四日 豊後水道艦載機邀撃（大村）使用兵力一紫電改二機 戦果一撃墜F6F、F4U、SB2C計一六機 被害一未帰還六機
- ⑭ 八月一日 九州南部中・小型機邀撃（大村）使用兵力

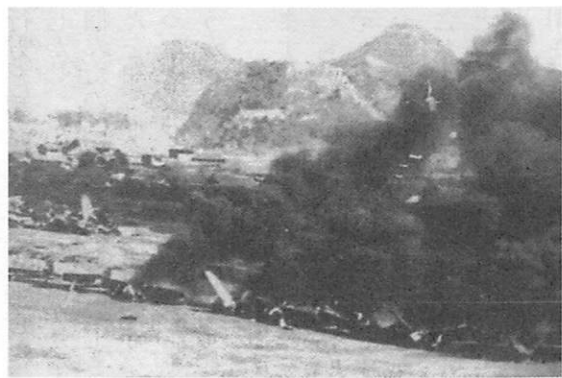
一紫電改二〇機 戦果一P147一機、B124一機（不確実） 被害一未帰還三機

- ⑮ 八月八日 九州北部大・中・小型機邀撃（大村）使用兵力一紫電改二四機 戦果一撃墜P147・P151計六機、B124一機、B129一機 被害一未帰還九機

続く

昭和二十年九月松山基地

廃棄炎上する紫電改



## 「ご縁」

海原会会員

富澤奈津子

(山形県上山市在住)

長野県出身、乙種海軍飛行予科練習生(以下「乙飛」と記述)六期、山岸昌司さんと、山形県在住の私の「ご縁」は、実際の地理的距離以上に遠い遠いものでした。

私は先の大戦で戦われた海軍航空隊員の方々にについて調べ、その肖像画を描き残すということをやイフワークにしています。これは自分なりにできる慰霊であり、日本人にもう一度彼らを思い出してほしいという気持ちからです。

その一人として、山形県出身で「南太平洋海戦」で戦死された甲種飛行予科練習生(以下「甲飛」と記述)四期、安部晃さん(空母「翔鶴」雷撃隊、電信員)を調べていく過程で、同じく「翔鶴」雷撃隊員であられた山岸さんを知ることとなりました。

ある年、初めて参列した筑波海軍航空隊(以下「筑波空」と記述)慰霊祭の日、筑波空記念館に展示された山岸さんのパネルの前で、偶然姪御さんの平林峰子さんと出会いました。どうやら、山岸さんは、中国での戦いのあと本土へと戻り、筑波空に教員として在籍されていたため筑波空に「ご縁」があり、姪の平林さんが慰霊祭に出席していたのです。

この日は、「翔鶴」雷撃隊を日々追っていた私にとって、偶然とは思えないほど衝撃的「ご縁」の日となりました。



平成30年筑波空慰霊祭

後日、山岸さんの故郷である長野県大町市を訪ね、平林さんのご厚意でお墓参りもさせていただきました。



(山岸さんのお墓は大町の山里にあり、二回のお墓参りは、平林さんも私も、熊や猪やら出たら怖い怖いと大騒ぎでした！(笑))

そのころ平林さんは、山岸さんとペアで戦死された偵察員(児玉清三さん)と電信員(村上守司さん)のお二人のことをどうしても知りたいと願っておいででした。

たまたま私が山形県在住であったことで同郷の、偵察員であった甲飛三期、児玉清三さんの

行方を知ることになりました。しかし、児玉さんの手掛かりを掴んだのは残念ながら、児玉さんを知る唯一のご親族が亡くなった直後のことであり、お話をうかがうことはできませんでした。そのことは今でも悔やまれます。

ちなみに児玉さんは、私が元々調べていた安部晃さんとずつとペアであったこともわかり、これもまた不思議な「ご縁」だと思わざるを得ません。

電信員の、乙飛九期の村上守司さんに関しては、平林さんの知人である乙飛九期について専門的に調査研究されている奈良県在住の女性から、とても貴重な情報もたらされていました。それによると、村上さんも山岸さんと同じ長野県出身であり、それもまた何かの「ご縁」のように感じました。

平林さんとお付き合いくる中で、「叔父さんに会いたい、近づきたい」という願いは、平林さんにとつての執念のように思えてなりませんでした。

後日、茨城県にお住いの研究



者、飛田伸二さんをご紹介いただきまして、山岸さんの最期も、安部晃さんの最期も知ることができました。

お二人の最期を知ったとき、もうすでにここにはいない安部さんや山岸さんを思うと涙が止まりませんでした。

もう一度日本人に彼らを思い出してほしい、知ってほしいという思いで今日までやってきた私には、彼らはいつも隣にいます。大切な大きな存在でした。

十分：彼らはもういないとわかっていたのに……

ですがここで終わりではありません。彼らの生きた証を、そして最期の様子を、私も見つけたいという気持ちは色褪せることはありませんでした。

最初に戻りますが、私が行っていること、それは彼らが遺された写真や思い出、お人柄からその方を絵に遺すことです。やつと在りし日の山岸さんを描き遺すことができました。

山岸さんを知ってからの数年分の想いを籠めました。できうるならば、まだ知りえなかった

ころの分も籠められていたらいなと思います：



この絵から何か感じていただけたらと思いますが、とにかく穏やかで優しい方であったと私は思っています。あまり大声を出すこともなかったんじゃないかな：無駄に殴ったりもしない方であつたらうと……

もちろん、危険なことや何度注意しても直らないところについて、一発ガンといれて終わり！

そして、平林さんに山岸さんの最期の様子を伝えた茨城県在住の飛田さんが、戦いの詳細を

文章にしてくださいました。僭越ながら、私の拙いイラストを載せておりますので、状況を参照していただけますとわかりやすいかと思います。

ちなみに、インターネットでは「ホーネット 南太平洋海戦艦爆」などと検索しますと、元の写真が出てきます。

「ホーネットに魚雷を命中させた山岸一飛曹」

昭和十七年六月、山岸昌司一飛曹は筑波空教員から「翔鶴」乗組に転勤し、同艦飛行隊四二小隊二番機の操縦員として南太平洋海戦（昭和十七年十月二十六日）を迎えます。

乗機は九七式艦上攻撃機（以下「九七艦攻」と記述）一二型です。

そして、第一航空戦隊（以下「二航戦」と記述）第一次攻撃に参加しました。

その際、山岸機は敵空母ホー

ネットの右舷側を雷撃した翔鶴飛行隊長村田重治少佐（海兵五十八期）直率の第一中隊十一機の中の一機であり、第三小隊の二番機でした。

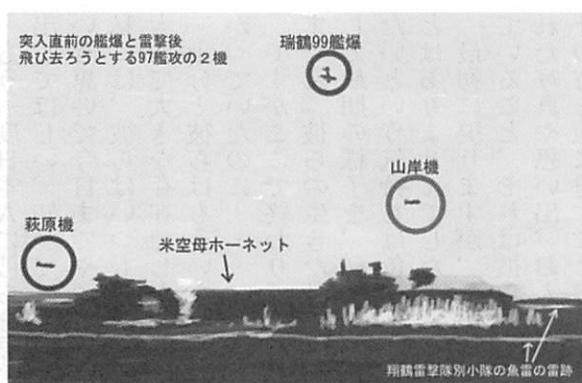
（正式には飛行隊四二小隊所属になるが攻撃隊編成時には、第一中隊第三小隊二番機となる。因みに第二中隊九機は分隊長鷲見五郎大尉（海兵六十五期）の指揮のもと、挟撃を企図してホーネットを左舷側から雷撃。惜しくも命中魚雷なし）。

この戦況の状況は、山岸一飛曹が属した第一中隊第三小隊長機（一番機）の操縦員であった萩原末二氏（操三九 一飛曹）が、昭和三十一年に雑誌「丸」に寄稿した手記に克明に記されております。

その手記によると小隊三機のうち、三番機は攻撃以前にグラマン（エンタープライズのVF10所属のF4F4と推定）に撃墜され、小隊長機と山岸機の二機がTF17（第十七任務部隊ホーネットを旗艦とする空母

機動部隊)の輪型陣内での魚雷投下に成功した模様です。

さて、南太平洋海戦の劇的な瞬間を捉えた写真といえ、まづ想起されるのは例の九九式艦



上爆撃機(以下「九九艦爆」と記述)突入の写真ではないでしょうか。

この写真には、ホーネットの艦橋に向かってほぼ垂直に降下して突入自爆せんとする九九艦爆一機のほか、雷撃を敢行する二機の九七艦攻が、明瞭に写っ

ています。

この写真は、一九四二年の海空戦の緊迫した状況を現代に伝える屈指の名写真とされます。そこで、先の萩原氏の手記ですが、実は・・・この著名な写真の状況と、実に酷似した内容が綴られているのです。

この事実から何が判明するのでしょうか？

結論から申せば、この写真に写る二機の九七艦攻は、魚雷の発射に成功した翔鶴第一中隊第三小隊機(第四二小隊機)であり、操縦桿を握っているのは、萩原氏自身と他ならぬ山岸一飛曹であるという事です。具体的に申せば、この写真の中で、ホーネットの飛行甲板上空を飛ぶのが山岸一飛曹操縦の二番機であり、同じくホーネットの側後方を低空で飛ぶのが萩原氏操縦の一番機であるという事が、断定可能と思われるのです。

なお、この写真は当時、ホーネットの右舷側に占位した重巡ペンサコーラ艦上から撮影され、

この前後のシーンの写真も数葉現存しています。

では、戦闘の事実を裏付ける根拠として、米軍が撮影した一連の写真に符合する、第一中隊第三小隊(四二小隊)の行動を、萩原氏の手記から箇条書き的に①～⑥に分けて適記してみよう。

なお、参考として二葉の写真を模した富澤さんのイラストを掲げて頂きましたが、①②については上段のイラストを、③④⑤については下段のイラストをそれぞれご参照下さい。

①小隊が射点に達する直前二番機である山岸機が一番機より前方を飛んでいた。

②ホーネットが、取り舵一杯の変針をした(第一・第二小隊の魚雷を回避するためと思われる)ので、同艦のやや右舷前方から進入した小隊は、方位角が移動してしまった(その結果は写真に見る通り、後方からの近接雷撃になったと

思われる)。

③自機の魚雷投下直後、萩原氏は前方に見えるホーネットの艦橋付近が爆発するのを目撃(本人は爆弾命中と記すが、この海戦でホーネットの艦橋付近の爆発は九九艦爆の突入によってのみ生じている)。

④一番機(萩原氏操縦)は避退する際ホーネットの右舷側を、低空を這い艦と平行するように飛行した。

⑤二番機(山岸機)は一番機の前方で魚雷投下を終え、ホーネット上空を飛び越えるも、バンクをした瞬間被弾し、反転してホーネット艦上に自爆を図ろうとしたが果たせず、海中に突入してしまった。

⑥一番機の偵察員(乙四 柴田飛曹長)と電信員(甲五 渡辺二飛曹)が、自機の魚雷命中を確認した。

では、写真との対比で①～⑥

の内容を考察してみましよう。

突入九九艦爆が降下するシーンを捉えた写真(上段イラスト)のホーネットは、艦尾波の長さから、三十ノット近い高速で航進中であり、しかも傾斜の状態から、左回頭(取り舵)中であると思われる。

この状態は萩原氏手記の②に符合します。よく見ると、この転舵で回避されたと思われる雷跡が、ホーネットの手前の海面に見えます。

④の状況は瑞鶴所属の九九艦爆がホーネットの煙突の一角に激突した時(下段イラスト)と考えて、ほぼ間違いないと思われます。

だから①のように、後方を飛んでいたのが一番機であろうと思われるのです。

何故なら、操縦していた萩原氏が、ホーネットの艦橋付近の爆発を目撃するのが可能な位置関係を考えるなら、後方の九七艦攻でなくてはならないからで

す。

ついでに付言するならば、この写真が撮影される数秒前に、山岸機と思われる前方の九七艦攻が魚雷を投下しています。

投下された魚雷は、投下機を凌ぐ速度で若干前方へ向かって飛翔した後、海面に射入します。

写真(上段イラスト)の中でホーネットの艦尾付近に白い濛気が見えますが、海面の射入痕から立ち上がった水柱が、消えようとしている状態です。

山岸機の近接発射の実情を示しています。

この写真に連続したショット(下段イラスト)は、ご覧になった方も多いでしょう。ホーネットの艦橋から九九艦爆突入の爆炎が上がるシーンです。

突入機は一旦ホーネットの煙突の左前方角に激突した後、艦橋横の飛行甲板に落下しました。艦爆の搭載燃料が凄まじい

爆発を起こした状況を写真は伝えています。



一方、二機の艦攻はどうしたかという点、写真の右端に、低空をホーネットと平行して飛び、それを追い越した一機が見えます。

これはまさに④の状況にほかなりません。こうして避退したのが、萩原氏操縦の一番機です。

一方、山岸一飛曹の二番機の姿は、ホーネットの艦首のやや前上方に認められます。

この写真の、原版に近いコピーを見ると、この機体は被弾による黒煙らしいものを引いており、ホーネットに向けて降下中のように見えます。これが⑤の状況です。

さらに、⑥につながる状況が、米側の記録で証明されます。

米海軍が認めた、南太平洋海戦でホーネットが喫した航空魚雷は三本。

うち一航戦第一次攻撃によるものは、右舷のほぼ中央部に一本と、同じく右舷後部に一本の計二本です。

驚くほかはないのですが、米側は以下の事実を記録しています。

一本目の魚雷が中央部に命中したのが、艦爆機が突入した約三十秒後、後部への二本目がその二十秒後(艦爆突入から約五十秒後)であるということです。

タイミングから判断して、こ

れはまさに四二小隊の二機が放った魚雷が命中したとは思われません。

米側の記述によると、村田中隊（第一中隊）の右舷への雷撃は、三つの小隊の順撃によって行われたと思われます。

そのうち、ホーネットに向かつて発射された魚雷は一個小隊二本づつ、計六本です。

さらに、米側の記録から判断すると、この六本のうち、最初の小隊（指揮小隊三機、村田少佐操縦の一番機はF4Fとの空戦で被弾、速度が落ちたところで対空砲火に斃れた模様、同機の魚雷発射は確認できない）の二本は艦首をかすめ、次の小隊（第二小隊、海兵六七期、鈴木中尉指揮の二機）の二本は発射過早のため、転舵によって容易に避けられた事が伺えます。

このように、ホーネットは右舷側から接近した四本の魚雷を、高速と巧みな操艦でまずかわしたのです。

ならば、残るもうひとつの小

隊、すなわち第三小隊（四二小隊）が、最後に後方から発射した二本が、ホーネットに命中したのは歴然です。⑥の記述通りです。

残念ながら、ミッドウェー海戦でヨータウンを撮った時とは異なり、ペンサコーラのカメラマンは、ホーネット被雷の瞬間を撮影してはおりません。

ペンサコーラが四二小隊に続く四九小隊（第一中隊第四小隊の二機）に攻撃され、急転舵したため、動揺著しかった故と思われる。

この四九小隊の雷撃を以て、第一中隊の攻撃は終了しました。

ホーネットの中央部に命中した一本目の九一式改三魚雷による爆発は、四層に設（しつら）えた水中防御隔壁をぶち破り、破口からの浸水効果で、前部機械室を満水状態にし、さらに隣接する後部機械室や一部ボイラー室の床下まで、大量の海水を躍り込ませて、それらを全て稼働不能にさせました。

機械室とはエンジンルームで

す。

その内部には、全長二百五十メートル、二万五千トンの艦体を、三十ノット以上の高速で航進させる動力源、十二万馬力の蒸気タービンが据えられています。

その機能が、わずか一本の魚雷による浸水で、完全に喪失させられてしまったのです。

ホーネットは、航行不能となりました。その二十秒後に後部に命中した二本目の魚雷は、いわばだめ押しの破壊力を発揮し、その爆発の衝撃で、舵故障を起こさせました。

空母の巨大な一枚舵は、左三十度で停止したまま動かなくなりました。

まさに、ホーネットの死命を制したのは、四二小隊の二機が発射した二本の魚雷であったのです。

ホーネットの転舵で、射点はやや後落しそうなのを素早く判断したものか、四二小隊の二機は思い切った近接発射を行い、

それが奏功したと思われます。中でも、山岸一飛曹の必中への執念は凄まじく、一番機よりも先行し、さらに踏み込んで雷撃を敢行しました。

また、「予科練外史（四）」に山岸機の雷撃行動を目撃した四一小隊三番機の電信員、萩谷三飛曹（乙九）の証言があります。

それによると、山岸機は魚雷投下直前に機を左側（ホーネット側）に切り返したそうです。

これは、ホーネットの転舵によって刻々と広がる方位角（やがて乗機と敵艦の進路が平行になれば射線が目標を捉えられず、魚雷は命中しない）を修正しようとしたためだと推定されますが、極めて大胆な行動と言えます。

何故なら、切り返すには機翼を傾けねばならず、その際海面との接触を避けるために、やや高度を上げねばなりません。

そうなれば、艦側の猛射を浴びる事は必至であるからです。いわば、捨身の行動とも言え

ましよう。

この凄絶な突撃により山岸機の魚雷は射距離を詰めた分、萩原機の魚雷より、目標到達が早かったと推測出来ます。

故に、ホーネットのど真ん中に当たった一本目の魚雷が、山岸機のものである蓋然性は、極めて高いと思われます。

山岸一飛曹は、自らの放った魚雷の行方を、我が眼で確認したかった（ペアが負傷あるいは戦死していた可能性あり）のでしょうか？

その為に、機を傾け、操縦席から後方を振り返ったのかもしれない。そのバンクの刹那、不幸敵の命中弾により、機は発火してしまいます。

咄嗟に：彼はホーネットへの体当たり自爆を決意：というよりも反射的に機をホーネットに向けて反転させます。

攻撃機搭乗員としての日頃の覚悟がそうさせたのでしょうか。

この壮烈極まる覚悟は当時、同乗のペアも共有していたはず

です。

この覚悟とその振る舞い、先の九九艦爆の搭乗員に対しても同様ですが、後世に生きる私はただただ瞠目し、頭を垂れるのみです。

米側の目撃談によれば、この時、ホーネットに突入しようとした山岸機は、激しく自転しながら海中に落下したとのこと：嗚呼。

F4Fの執拗な襲撃に耐え、輪型陣の十字砲火を冒して突進しながら、高速で回避する敵艦を照準する：この極めて困難な雷撃行を達成した山岸一飛曹。

惜しむらくは、魚雷命中の瞬間を網膜に宿すことなく逝きました：享年二十二歳。

しかしながら、その行動は勇敢の一語に尽き、その最期は後に言う：「雷撃精神」を真に体現したものと言えましよう。

（飛田伸二さんの著書から引用させていただきます。）

この内容の詳細については、「母艦航空隊」（潮書房光人社）

の、萩原末二さんの項、「南太平洋海戦での戦い」に掲載されています。この日の攻撃の最初から、萩原さんが駆逐艦に救出されるまでが書かれています。



日本のため、戦い、守り、命を落とされた飛行機乗りの全ての日本男子たちのご冥福を、心からお祈りいたします。

そして、とても素敵な姪御さんと出会わせてくださって、どうもありがとうございます。どうかどうか、これからもこの国を見守っててください。

（終わり）

## 青春の日々

海軍甲種飛行予科練習生

第十三期生

石井 信市郎

昭和十八年十月一日

土浦海軍航空隊入隊

昭和二十年九月六日

郡山海軍航空隊復員

### 入隊の日

旧制中学の卒業を待たずに、四年生の秋、甲種飛行予科練習生として志願し、土浦海軍航空隊に入隊。十六才だった。

当時の社会情勢では、第二次大戦中で、軍隊志願が非常に多く、政府も国策として青年達を勧誘していた。そして、父母も反対できないような雰囲気だった。

『命をかけて祖国を護る』若者は皆只その一筋の思いだけだった。昭和十八年十月一日。決死の門出は、村の仲間の人達だけに伝えて簡素だった。

当日は、何時もの中学の制服と帽子・靴で、婦人会で心をこ



めて作ってくれた「千人針」だけをしつかりと腹に巻いてさあ！出発だ。

荷物は何も無い。軍隊からの指令書一枚だけ、それに幾許かの小遣い銭を持って行った。

見送りは、父と本家の伯父だけで、家から四kmもある小学校前のバス停まで一緒に歩いて見送ってくれた。当時は、車などには無く、部落からも頻繁に出征していたので行事は簡素化して負担を少なくしていた。

バスに乗って一人になったとき、初めてこれから自分は、兵役につくのだと実感が湧いてきた、と同時に軍隊生活に対する不安が交錯していた。

バスに乗ってからその後、どのようにして何処を通り、土浦の航空隊に着いたか、六十年余り過ぎた今、思い出せない。

多分、千葉駅周辺に集合し、係官が誘導して、土浦に行き着いたのではないかと想う。

航空隊につき、落ち着いた時、門口で見送ってくれた母や姉妹の顔が頭をよぎった。

## 軍隊生活（土浦航空隊で）

飛行兵は、特に機敏さや慎重さや正確さが要求された。

「君達のチャンスは一度だけだ。失敗は成功の基ではない。破滅だ。」入隊後、教官からの第一声は本当に心に応えた。

少年兵の一日の生活は分刻みで、ときには教官の厳しい鉄拳がとんでくる。

最も辛い事と云えば、朝が早い事で、六時起床ラッパとともに起き、吊り床を素早く束ねて、部屋の中段にある格納所に整然と格納することだが、体の小さい少年兵にはきつかった。

しかし、不思議に起床ラッパとともに目は冴え、体も軽快によく動き、人並みにはやれた。

また、海軍は水を非常に大切にする。洗面器一杯の水で、歯をみがき、手を洗い、洗面と全部一杯で済ませた。艦内生活を基本にしての訓練だ。

洗面が終わると、整列し、隊を組んで広い練兵場まで行き、全員揃ってラジオ体操だ。

そして朝食は、麦飯と味噌汁、うめぼし、漬物程度の至って簡

素だったが大変おいしかった。

日常訓練の内、学科授業は殆んど兵舎内で行われるし、体育や教練は練兵場でそれから水泳訓練はプール、ヨット、カッターは霞ヶ浦で船を出して行われた。

一班で一隻の短艇を使用して人数は十人前後に教官一人といったところであった。

こうして八ヶ月位土浦で一般的な基礎学科や体育技能訓練をおわり、次の隊に移動した。



前列右から2人目が筆者、同左から2人目は回天特攻で戦死した森稔海軍少尉

## 第二の基地 (名古屋海軍航空隊 岡崎分遣隊)

街の中心を流れる矢作川に沿って北に遡ること四kmの草原に岡崎分遣隊があった。ここは、実戦部隊と同居しており、片や雷電や紫電と言う新型の偵察機を運ぶ中継地として飛行場を使用していた。

われわれ訓練隊は、専ら赤とんぼを使って、練習生が前席に乗り、教官が後部席に乗ってひと組となつて飛行訓練に励んでいた。

操縦桿は前と後ろが連結されていてどっちでも操縦できるようになっていた。

何回か、教官と同乗し、大丈夫だと教官が判断すれば、単独飛行をさせてくれる。私の場合は、七時間十分の同乗訓練の後単独飛行を行った。初めての単独飛行は、まだ頼り無く体の震えが止まらなかった。そして着陸してもエンジンの絞り甘かったたので惰力があり、着陸距離がなくなつてしまったことを覚えていた。

その頃は、燃料も乏しく思うように訓練ができなかった。それでも一番早いクラスにはいつて単独飛行ができて好かった。

この後は、特殊飛行に移って失速反転・急降下・宙返り・背面飛行等の訓練で総飛行時間で百時間ちよつとだった。まだ、ひよこかなあ！

### 第三の基地

#### (郡山海軍航空隊)

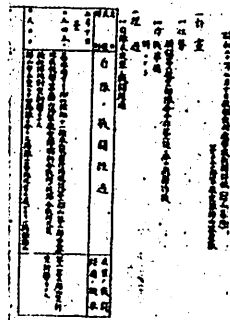
こうして、第三の基地に移動したのが、昭和十九年の五月頃だったと思う。

その頃の資料がないので、正確なことは分からない。

草原のようになつていて、設備などは殆ど無かった。新しく開拓した場所かも知れない。

郡山では、練習機も少なく、燃料が不足して余り訓練ができなかったように覚えている。そのうちに、アメリカ機による攻撃をうけ、飛行場は穴だらけになり、使用できなくなり、爆弾の破片を拾い集める仕事ができってしまった。その上、兵舎は、破壊されて使用できない状態に

なり、東方三、四kmの山間に横穴を幾つも掘って寝台をいくつも入れて、そこで寝ることになった。



語る物語を攻撃の米軍の当時の  
報詳戦闘基地郡山

毎日そこからの通勤と言うわけだ。そうするほうが安全だったのだろう。

そして暑い夏の日、突然『全員兵舎前に集合』の指示がでた。スピーカーを通して終戦の詔勅を聞いた。信じられなかった。

昭和二十年八月十五日、日本は、連合国に無条件降伏をした。そして、戦争は終わった。勝利を信じ、厳しい訓練にも耐えてきた志願兵にとって、まさに沈痛の思いだった。

終戦により、軍隊はすべて解散ときまった。それから三週間後、我々に復員命令がくだった。九月二日だった。

あまりに大きな変化に、自身心の整理をどう付けたらいいのか迷っていた。

ここで、二年間の軍隊生活の中で心に残ったエピソードを二つ書き加えたい。一つは第二の基地で休日友人とたまたま食べた畑の大根のこと、もう一つは、遠いところを両親が何度も面会に来てくれたことである。

### 畠の大根(第二の基地で)

この日、久しぶりに休日で外出許可がでた。外出のときは勿論、海軍少年兵の制服で街にでた。町には、ボランテニアで兵隊のクラブとして自宅を解放し、接待してくれる家があった。この日も気の合った仲間と町を歩いた。兵舎内と全く違った町の穏やかな雰囲気、心が和んだ。この日は、ボランテニアのAさんの家に寄せて頂いた。Aさんの家は薬局だった。しかし、戦時中だったので薬は殆ど無かった。

茶菓子を頂き、厳しい日頃の訓練を忘れて故里や友達のことなど、楽しく話した。大変

親切に対応して頂き、寛げる一時を過ごす事ができた。

お礼を述べ、門限に遅れないよう帰路を急いだ。

暮れかけた、畠の中の道を足早にきたとき、収穫した残りの大根が枯れ葉の下から何本か顔を覗かせていた。

一人が突然冗談まじりに言った。若い少年兵の胃袋は、まだまだ余裕があった。

「食べられるかも知れない」

「うん、食べられそうだなあ」

早速、紺の制服を汚さないよう慎重に土を払い、畠の大根を、それぞれ一本づつ抜いて、一斉にがぶりついた。

実家にいた時は、大根などと思っていたが、何とこのときの大根は、甘くて大変おいしかった。みんなびつくりした。

冬の大根が甘いという事を、このとき初めて知った。大根は、生育が悪く、多分農家の人が畠に捨てたままになつていたものだからまあ、見ても咎めることもなかっただろう。

むしろ、紺の制服の少年兵達

が、大根にかぶりついている様子は、ユーモラスというか、一方では、同情的に見られたかもしれない。近頃、冬の畠の大根を見るとあの少年兵時代のたった一度のスリルが楽しかった思い出として脳裏をよぎる。あのときの同期生の顔が浮かんでくる。

みんな、どうしているだろうか！

その後、音信はないままだ。

### 両親の面会

入隊中、父母は何回か心づくしの手料理を持って面会にきてくれた。

何よりも嬉しかった。

毎日、農作業に追われている両親にとって、家から二時間位歩いて駅に行き、それから、何回か列車を乗り継いで三時間もまた岡崎には、五時間もかけて面会にきてくれた。

さぞ、大変だったろう。

明日が分からない自分の命を、どれ程案じていてくれたか、今にして思うと、胸がしめつけられる思いでいっぱいだ。

小柄な母は、モンベ姿で、完治しない足の傷をかばいながらきてくれた。

あるときは、おいしい大きなおはぎをいっぱい持参してくれた。前の晩に姉や妹達も手伝って早朝の出発に間に合わせて準備してくれた事だろう。

父母と、面会室で持参してくれたおはぎを頬張っていると、実家に帰ったような錯角に陥ってしまうのである。

田舎の話がほんとに懐かしく、面会時間が終わり、父母を見送ってはたと厳しい日常の気分にもどる。

肩を落として遠ざかる両親の後ろ姿を見送るときは言葉もない。

最後の面会の日、東京大空襲の日だった。昭和二十年三月十日帰りは、列車が不通になり、東京から市川駅あたりまで線路伝いに歩いて帰宅したとのことだった。線路には、爆撃のため、犠牲者の死体が山と積まれ、戦局の厳しさをひしひしと感じたと手紙で知った。

その父と母も、今は天国の人

となつてしまった。父は六十三才の若さで他界し、母は、長年の足の傷を克服して九十二才の長寿を全うした。

父にも母にも世話になつただけで、是といった親孝行は何一つできなかった。

間もなく、五十六回目の終戦記念日（平成十三年）郷里の旧盆でもある。

両親の墓前に、香を焚き、花を供えて霊を弔おう。

### そして終戦

昭和二十年八月十五日終戦の詔勅が下され、日本は無条件降伏をした。

長く続いた第二次世界大戦は、連合軍の勝利で終結した。

国民が一丸となつて戦つた努力も効なく、大勢の戦士を大陸にまた南海に失った。本人は勿論、残された家族も残念に思っているだろう。

心を新たに、頑張らなければならぬ。

### 復員

終戦の日から三週間後、昭和

二十年九月六日 隊から復員命令が出た。入隊してから二年近くの歳月が過ぎていた。二年の歳月は、二十年とも思われる程長い日々だった。

これから、日本はどうなるのだろう。まだ十八才の若さの胸の内は複雑だった。

復員の前日、日常個人が使用していた衣類や毛布・靴等すべて各自に配分された。

翌日は、海軍の制服、制帽に着替えて配分された衣類・毛布などを衣囊に整理して、各地域毎にまとまって復員の途に着いた。

再び会うことは、出来ないと思っていた父母や姉妹・弟達また祖父母もみんな達者だろうか、夢を見ているようだった。

上野駅までは、団体でかえり、ここで解散した。

お昼頃、千葉駅に着いた。

実家の方は、交通の便が悪いので、その日の内にはとても帰れそうになかった。仕方なく、茂原駅まで列車でゆき、母校の中学近くに在学中保証人を依頼した親戚の家があったので、

この日は、一晚ここでお世話になった。

保証人の家でも無事復員を大變喜んでくれた。

翌日、ここから自転車を借りて実家に向かった。

長柄小学校の下では、まだ除隊しない陸軍の小隊の一団にあった。

ひと昔前の、中学時代の懐かしい片道三里もある通学路は、入隊前と何も変わっていないかった。長く急な鼠坂も今日は全く苦にならなかった。漸く夢に見ていたわが家に辿り着いた。

お昼前だったと思う。留守で誰も居なかった。その後はどうしたか、全く思い出せない。勿論、連絡もないので（今のよう電話などは、農家には全然なかった）秋の取り入れも間近の時期なのでみんな忙しい。しかし、「何も手伝わなくてもいいから、留守番をしながらゆっくり体を休めたい。」といってくれた。家族が仕事に出て行った後は、全く静かで、裏山の風の音・小鳥の声位で他には何も聞こえない。

つい先日までの厳しい軍隊生活が夢のようである。

家族の温情にささえられ、一日と生気を取り戻していった。

さあ！これから何をしたらいいか？

長男なので農業を継ぐか？または、サラリーマンになるか？

何時まで経っても答は出ない。

「やっぱり、学校へ行って勉強をし直そう！」半年もしての決心だった。

当時農村では、一日遅れで新聞が配達されるし、進学や就職等の情報は皆無に等しかった。

加えて二年間の学業のブランクがあり、入試にも何かと支障があった。できれば工業系の大学と考えていたが、父の勧めに従い普通学科に決めた。

取りあえず、目先の進路が決まり、ひとまず落ち着いた。

しかし、終戦当時の社会は混乱し、都市では、食糧難に加え、住宅も衣類も少なく、みな生きる事だけで精一杯だった。

幸い、実家は農家だったので、食料については、それ程苦勞はなかった。

これからの日本はどうなるのだろう！

現在の経済的發展を遂げた日本の姿など想像もできなかった。

只一つ、心の奥に明るい光が射していた。それは、ずっと続いてきた軍国主義から百八十度転換して自由主義社会へと変わったことである。

さあ！これからが我々の青春だ！胸一杯新鮮な空気を吸った。

復員の時の制服・制帽、靴その他を全部手入れて大事に保管した。

軍隊のときのように、死ぬ気でやればどんな苦しいことでも乗り切ることができる。頑張れば、光も見えてくるだろう。

だが、まだ十八才だ。最善を尽くすのみだ。

若さだ！頑張れ！

復員時「海軍一等飛行兵曹」今は幻の階級である。

○ ペンを捨てただひたすらに大君の

辺にこそ死なめと出征しあの日よ

○ 海ゆかばみずく屍ぞきわまりて

とびたつその日戦終わりぬ

（終戦の日）

○ きびしかりし少年兵の

日々はそのままに飛行機がねは宝となりぬ

（筆者の甲飛十三期石井信市郎氏は令和元年七月十四日にお亡くなりになりましたが、子供や孫たちに伝えられればいいと生前に執筆されていた「青春の日々」を、ご遺族のご意向により今回機関誌「予科練」に寄稿していただきました。

生前石井様はご家族を連れて筑波山に登られたそうですが、頂上で海が見えるとはしやうご家族に「あれは霞ヶ浦だよ」と教えてくれたそうです。かつて赤とんぼから眺めた霞ヶ浦をどのような思いで見つめておられたのでしょうか。）

事務局

# 私の昭和史 ③

海原会会員

平野 八代子

父はこれから先が大変だよ「馬鹿者が」と私と母の顔を見ながら呟きました。父の感は的中しました。

列車から全員荷物を持つて降りて、倉庫か格納庫のような所へ収容されました。コンクリートの床の上には荒縄で区分けがしてあり、畳二畳くらいの広さの所に五人程が寝泊まりして五日間の滞在となりました。母とは互い違いで、私の体の上に母の足を乗せ寝ました。なかでも辛かったのは、襲いかかる蚊の大群でした。酢に反応した蚊に夜は一睡もできず、母の足の手当てをしながら昼寝で寝不足を解消しました。そんな時、突然出発命令ができました。列車まで五キロの道を歩くので、歩けない人は残ることになりました。家族が、別々になるということ

でした。私と母が残らなければならぬのかと思いました。

引き揚げの病院船が出る時に移動すると聞いていた父は、石鹼の中に隠し持っていた金の玉を持つて飛び出していきしました。他の者は、荷物を持つてぞろぞろと外に並び始めました。こんな時に、父は何処に行ってしまったのか、私は荷物を捨て母を背負って妹と共に歩くつもりで縄を三本合わせて結びました。同じ車両の人達が母と私の荷物を持つてくれました。父が戻るまでと、いつまでも座り込んで動かないで頑張ってくれた人、父の事を係員に話して何分でもいいから出発を遅らすよう頼んでくれる人、何とかして皆で一緒に帰ろうと団結は固かったです。しかし、もう出発の時を伸ばす事は無理な状況となり、男の人達が母を交代で背負ってくれることになり列の最後に並びました。その時土埃を上げて荷馬車が倉庫の前に止まりました。車夫の横に父の姿、又も目を見張ってしまいました。大きな荷台に子供や老人の荷物を山のよ

うに積んで母を乗せました。心配をかけて申し訳ないと、藁の紐を握り締めて父は泣いていました。父の涙に「御苦労さまでした貴男のような事は私達にはとても出来ません」「助かりました。」「日本は遠いですなあ。」「急に皆が元気になったようでした。笑い顔はいいなあ。このグループは暴動を免れた人達だったので、どこか旅館に逃げ込んだ時の人達のような悲壮感はありませんでした。従って、懐も暖かそうでした。非常食は皆尽きていました。引揚援助局なる所から、コーリヤンの御粥が用意されていましたが、ポロポロとしていてそれを口にするのは疲れ切った体には堪えませんでした。下痢で道端へと駆け込みながら五キロの道を、皆へとへとになりながら休むこともなく歩いて行きました。妹は頑張つて荷物を背負っていましたが、父が母の手に渡しました。妹は嫌がりながらも嬉しそうでした。よく頑張ったねと手をとった私に「私も男だもん」と負けずの妹でした。

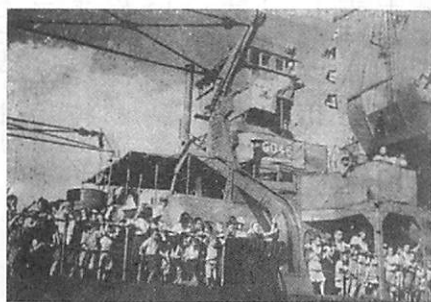


目的地には列車が待つていました。沢山の人で溢れかえっていました。裸足の人、左右の靴の違う人、ボロを纏い髪は逆立ち、わらすぼそのものの姿は、北の方から逃げて辿り着いた人達のようにでした。命だけをここまで持つてきた気力は、日本へ帰りたいエネルギー以外のなにものでもないと思いました。駅前の人々、誰か知っている人はいないかと思いましたが、知ってる顔は一人もいませんでした。なんとか列車に乗り込み、今度は止まらないで欲しいとの願い



の中で、止まった所はコロ島なる港でした。

海だ、船だ、船には日の丸の旗が翻っていました。船名は「長運丸」(だったと思う)。波止場にはそれぞれ思い思いの行動する大勢の人達の姿がありました。船のデッキの船員が日の丸の旗を振っています。座り込んで船に手を合わせる人、泣き伏す人、万歳万歳と叫ぶ人。そこには日本人以外は誰も相合わせること



のない世界がありました。家族揃っての乗船、日本の船、しかし本当に喜んでいいのか不安が、乗り込むまで気が抜けませんでした。

「勝つて兜の緒を締めよ。」の緊張感は今までの体験一年間で身につけていました。着の身着のまままで飛び出した私達には、七年間の思い出の品物は何もありませんでしたが、命だけは揃って持ち帰る事ができただけでも、満足でした。しかし、在満十七年の父はさぞや無念の思いであつたことかと思ひました。

久しぶりの睡眠でした。貨物船の底は暑いうえに、荒れる海に体が転げるようでした。それまで張りつめていた気持ちが一緩み、安堵感に気の抜けた体は、暑さと船酔いで体力を奪われ次々と死んでいきました。遺体は白布に包まれ水葬となり海にながされました、汽笛を鳴らしながら船が遺体の周りを一周します。残念無念でした。きつと居合わせた誰もがそう感じていたと思います。船の中は船員皆が日本人でした。この頃になつて、やっと心からの安らぎを感じられるようになり、周囲の見知らぬ人が「日本の博多湾は目の前ですよ。頑張ったんだね。日の丸の旗が好きだね。一番き

れいだと思います。」「昔ね、アメリカ人が日の丸を自分の国に売ってくれと言ったが、売らなかったと聞いたことがあるよ。」などと笑いながら話してくれました。船は博多湾に停泊し、五日間は下船できませんでした。病気の感染を防ぐためと聞かされました。毎日甲板で船員さんから本を借りて読んだり、何となく友達になつてくれて話相手になつてくれたりで数日を過ごしました。

この頃は、父がくれた石鹼で男の子だった私は十七才の乙女と変身していました。

上陸前に「一人千円以上は持つて上陸はできません。千円札にこの切手を貼ってください」と言われて、沢山持つている人達は持ち合わせの無い人達に一枚一枚と配つて廻りました。上陸後に五百円をバックする約束が出来あがり、和やかな雰囲気流れました。

父は、正解でした。石鹼の中に隠し持った金の玉は石鹼として日本に上陸したのです。国債、株券を海に破つて流す人、様々

な人間模様で一時ざわめいた後、いよいよの上陸となりました。



焼け野原の街跡

## 第九章 帰国

上陸するや、白い粉(多分ダニやシラミの駆除目的)を全身に吹き付けられ、敗戦後の逃亡生活の中で、暴行を受けた女性は妊娠や性病の治療のために婦人科を受診することとなりました。また、下船後は数か所の温泉施設に分宿することとなり、長旅の体を癒すこととなりました。「二年振りだ」と昔のように成った人の体から皮が一枚二枚

と剥ぎ取るように温泉の水に流れていきました。やっとの人心地、祝いの膳が用意されていました。赤飯に尾頭つきで、男の人には一人一本のお酒がついていたと思います。

アメリカ軍の毛布が支給されました。純毛でした。たしか二枚だったと思います。夜はお互いの苦勞話やこれからの暮らしの話で更けていきました。「お世話になりました。お元気で。」と、別れはまた辛いものがありました。昭和二十一年八月十六日吉林を出発して、九月十八日三十四日に及ぶ私の満州からの引揚は終わりを告げました。

## 第十章 故郷へ

大分までの運賃を支払った覚えはありません。車窓を流れるなつかしい景色、窓にしがみついて厭きませんでした。日暮れが迫る頃に、宇佐あたりで裸電球に蚊帳を吊るしている人影、縁側で涼んでいる人達、畑を自転車で行く人、日本のなつかしい風景がそこにありました。間もなく、列車は左手に別府湾を

臨むあたりを走り始めると、遠く近くの漁火、子供の頃の毎日の遊び場だった海の匂い。「空気の吸い過ぎ」と、父の一年ぶりの笑顔がそこにありました。別府駅や町筋は、肌も露わに華やかに着飾り、アメリカ兵の腕を組み抱き合う日本女性の姿に目を疑いました。別府はアメリカになったんだと思いました。

テンポの速い外国の音楽、何もかもが信じられない光景がそこにありました。大分駅に降り立ち目にしたものは、別府湾の海面でした。本来なら建物の蔭に隠れて見える筈がない海が月の青白い光を映していたのです。私達が自分を出た時の町並みはそこにはなく、バラックや屋台が軒を並べる荒れ果てた町となっていました。

電車で行ったのか、歩いて行ったのか覚えていません。母の実家は月に映えてどっかりとそこにありました。転がるように裸足で叔父夫婦が飛び出してきました。「心配してたぞ。よく帰ってきた。引揚が始まってから落ち着く日はなかった。待つ

てたぞ。大きくなったなあ」お定まりの涙々の対面でした。しかし、そこには私が姉とも慕った叔母の姿はありませんでした。お嫁に行ったんだと思いました。祖母が私を抱き締めて泣いています。「敏江が生きて帰ってきました。」姉同然の叔母の死は、今まで頑張ってきた私に、これでもかの追いつきの出来事でした。「嫌だ嫌だ」と子供のようにワーワーと泣き叫びました。十七才の夏の出来事でした。

叔母は病死でした。

叔父が静かに話しました。

『敏江には結婚を約束した人がいた。軍人だった。空襲警報の度に親父が背負って船の底に避難させ、砂の上に布を敷いてその上に熱の体を隠しての日々だった。病の床に臥す身ではさぞ辛かっただろう。敏江の彼は名前を岩永といい大分宇佐の基地に配属となり特攻隊員として出撃していったと聞いた。敏江は病の床で白い絹の布に赤い糸で自分の名前を縫い取り彼氏に贈ったそうだ。』

ちなみに、私の家の家系は長崎出身の生粋のキリシタンで大友宗麟の地の大分に、大叔父が宣教師として来県をしたのを機会に親族大移動で大分県人となったのです。私の従弟は今、神父として活躍しており、伯母はローマ法王に招待されたり九十八歳の今も日曜礼拝には一人で出かけるようなビックな人です。従って、戦時中も常に礼拝を欠かさなかった祖父には何時も憲兵の目が光っていたそうです。空襲警報の最中に、水枕の止め金を見失い灯火管制用の黒布を巻きあげたところ、時を待たずしてドカドカと憲兵が入ってきてスパイ容疑で連行されたそうです。叔父の話は続いた。

『大分の町は昭和二十年七月の大空襲で焦土と化し、海には水柱が何本も立った。非難した船の底まで火の粉が舞った。水平線が白んで見えないほどの水柱をみて船底から這い出した。すると、そこには信じられないことに、我が家一軒だけが、焼けずに残っていたんだ。思わず神

への感謝の祈りをささげたよ。

後日、白いマフラーで出陣する特攻機の兵士の写真が大きく新聞に掲載された。出陣前に宇佐基地から大分の小学校に別れに来た時の記事だった。

まぎれもない岩永君の最後の姿がそこにあつたよ。良かれと思つての岩永君の事が載つた記事を敏江に見せてしまつた友人の行動が、もう一度だけでも岩永君に会いたいと必死に現世にすがりついていた敏江から生きる力をそぎ落としていったんだなあ。まだ、二十一才の花の盛りに帰らぬ人となつた。まるで、岩永君に導かれたかの様な穏やかな最後だったよ。今頃は二人で仲良く暮らしていると思うよ。可哀想だったなあ……」

叔父の話は終わった。

祖母から、敏江が八代子にと残した物として叔母の晴れ着を手渡されました。「姉ちゃん私は頑張つて帰ってきたのに何で何で」と泣くことしかできない私でした。岩永さんのことをもつと知りたいという気持ちになつていました。終戦直前の二人の

旅立ちでした。

原爆や東京大空襲を始めて知りました。益なき戦いで多くの命や財産を無くしてしまひました。なんとか、命をながらえた者へも容赦無用の明日の暮らしが待つていました。小学校へ入学してから父は私に、人と話をする時には、できるだけきれいな言葉で会話をすることを強く要求していました。このため、帰国後一人しやべり言葉が違ふ私は疎外され、子供の頃の友だった人達はひとりまたひとりと去つて行きました。

そんな私に父は、浜辺で薪を拾い外に釜戸を作り一斗缶で毛布を赤や青に染めてハーフコートやバック等を作つてくれました。その頃宝くじ、三角くじが十円でした。千円（白米一升が七十円）が父に当たりました。そのお金で手に入れたミシンで縫つてくれた洋服には、年頃の娘を男の子と見間違えるような目に会わせたことに申し訳なかつたと思う親心であつたと今は思っています。

しかし、そんなスタイリスト

だった父らしい愛情表現が、かえつて仇となり「満州帰り満州帰り」と周囲の人から疎外されました。広い世界を知らない島国根性の人達に何にも話す言葉はありませんでした。

家は焼け残り、叔父は網元で青年団長をする等地区で活躍していました。そのような恵まれた環境が目障りで気に入らなかつたのかもしれませんが、そうそう、蛇足ですが当時漁業組合員の息子さんだった、元総理大臣の村山富市さんは明治大学を卒業して地元に戻つており、よく叔父の所に遊びに来ていました。私もよく「八代子、八代子」と可愛がつてもらいました。

私は、在学証明書もなにもなく、中途半端な年であつたので学校に行くことは考えていませんでした。食糧難の時だったので祖母が干し魚を背負つて行商に回るのについて回りました。何もかにもが統制品で、お巡りさんの取り締まりに悩ませられながら祖母と二人で行商に回つたのはとても勉強になりました。また要領を旨とすべしの試みの

業を習得しました。「世渡り術たい、学校では教えてくれないよね。」と祖母との楽しいひと時でした。朝一番列車で宮崎まで出向くこともありました。

その頃の私は、本が一番の楽しみで夜更かしして読むのでいつも叱られていました。そんな私を見かねたのか叔父が「八代子も年頃になつてきたんだから、いい婿が網にかかるような場所に網（貸本屋）を張つて来たぞ、電車を通え、大学通りだ。男はより取り見取り、自分の目で選べ」と貸本店を用意してくれました。

父は不器用で愛情表現が下手な男性でしたが、その分叔父に沢山可愛がつてもらい、お蔭で楽しい電車での出勤が始まりました。父は地元にあつたトキ八百貨店の紳士服部のチーフデザイナーとしての職を得て、母は手内職、妹は洋裁専門学校とそれぞれが明日に向かっての一步を踏み出しました。

貸本店は、本棚が淋しくなる位に客足はありました。月に一度の古本の入札には叔父につい

て行きました。そんな楽しい日々を送っていました。ある日店に突然現れた客に目が点となり声も出ませんでした。海軍の制服もりりしい姿の青年が入って来たのです。

お互い目を見つめ合ったままの時間が流れました。「海軍さんだったんですか。」「飛行機が無くてね穴掘りばかりやってましたよ。特攻のなりそこないですよ。」と、「宇佐の母方の実家に居たんですが従兄の代になりましたね。田舎でしてね。職を見つけないと大分に出てきました。」「今はどちらにお住まいになられているのですか。」「その下宿にお世話になっています。」「運命の人との出会いでした。宇佐・特攻・容姿端麗、夢のような人の出現に叔父の「網を張ってきた。」「話を思いだしてドキドキ心ときめく私でした。」「鯛だ、私の鯛であって欲しい。」「一目ぼれでした。」

その日から彼は、毎日のように店に本を借りに来ました。引揚援助局に職を得たとの事でした。彼の周りには女性の影が何

時も付きまとっていました。私にも当時六組の縁談があり、全て私には不釣り合いな良縁ばかりでした。丁度その頃、町の美容院から日本髪モデルをお願いしたいとの話が舞い込んできました。父が話を聞くことになりました。どうやら別府の公会堂で、進駐軍を招いての慰安会の席上で美容院主催の出し物が計画されるらしく、十二人の女性が一番最後に日本髪姿で出演し、歌や踊りを披露する催しらしいのですが、戦後初めての催しなので準備に大変苦労しております、是非出演してもらいたいのですがという話でした。父は即座に「娘は別府を嫌っているの無理ですなあ」と断りました。



日本髪 乙女島田。

父は引揚の時、列車の窓から見た別府を思い出して、いい気はしなかったんだと思いました。何度も依頼にきた担当者「日本が戦った国の兵隊を相手に、なんでそんな事をする必要があるの。亡くなった兵隊さんの事を思い出したことはあるんですか。」「なんなの日本人の女の人のあの様は。」「頭に血が登った。」「出ません。」「ごめんなさい。」「私が伝えると、」「そこなんです。」「アメリカの兵隊に日本の素晴らしい伝統を見せたいんですよ。そして日本髪こそが日本の誇るべき伝統なんです。だから、見せたいんですよ。芸者ガールでない日本娘の良さを見せたいんですよ。」「と言われると、単純と言うか単細胞の私は、担当者の「日本娘の本当の姿」というフレーズにコロリと負けてしまいました。前言を撤回することになりました。大変なことになってしまいました。馴らし髪とかで十日間ほど、乙女島田という髪型での電車出勤でした。着物にポツコリ下駄の姿はまるで見世物でした。家の者には見

来て欲しくはありませんでしたが、彼には来て欲しいと思いました。でも、彼はご機嫌が悪く来てくれませんでした。会場には紫の総絞りの振袖に羽子板が用意されていて、まずはリハサルとなり十二人ともカチカチでその顔は引きつっていました。本番の時は皆で笑顔、笑顔、アメリカに見せるんでなく日本の特攻で死んでいった人達のために笑顔で頑張ろう。私が一番年が若かったので一番最後の一番となりました。最後は十二人全員で舞台や花道で思い思い踊り廻りました。花束贈呈があり大盛況の内に幕が下りました。公民館の人が、「貴女は日本舞踊を習っていたのですか。」「と言って来たので「いいえ、郷土の盆踊りの振り付けで鶴崎踊りです。」「と言うと、皆が大笑いしたのを覚えています。会場からの帰り道に彼の会社立ち寄りしましたが彼の姿はありませんでした。同じ職場の女性が「残業があったのに女の人に来て、一緒に映画にいったんよ。婦人警官だってよ。気分悪いよね。何

考えてるんやろう。何人も女の子が来るんよ。まったく頭にく



鶴崎踊り

せんでした。

次々に来る縁談に私が全く関心を示さないので、父に相談されて、様子を見に来ていたのだろうと思いました。ある日、叔父が頑張つて待ち構えている店に、何も知らない彼が入つて来ました。彼は、いつものように話しかけることもなく、本を借りると店を出て行きました。そのあと、叔父も黙つて私の肩を叩いて、店を出て行きました。

久しぶりのデートで夜が遅くなりました。父から「男を連れてこい」と初めて大声で叱られました。きっと叔父が何か告げ口したなと直感しました。

翌日彼が店を訪れた時に、その事を話しました。すると彼は「いつかは、お父さんにはお目にかかるつもりでしたが、自分には貴方を妻に頂く資格は何もないのです。貴方に苦勞をおかけする事は目に見えていますので、貴方の方から嫌われるような事ばかりしていました。一日一度はお会いしたくてお店にお邪魔していました。」と話してくれました。

「父は、苦勞人です。ありのままの今の話を全部してください。私には色々の縁談が来ていますが、全部私の一存でお断りしています。それを黙って見ていてくれる父です。私も多少の苦勞を経験していますので、私を信用してくれてるんだと思います。もし父がOKだった時は、後の事は叔父が何とか力になってくれます。特攻精神で突入してください。」と私が言う、「いやー、勇気が湧いてきました。では、早速ですが明日十九時にお伺いしたいと思っていますが、よろしいですか。」と彼、「いい悪いもないでしょ。来いと言ったのは父ですよ。」と私が言えば「貴方は見かけによらず強い人ですね。」「もしかして、男っぽい人ですね。心配ないんですか。」と彼、たわいもない話を、七十年を経た今でもはつきりと覚えています。翌日になり仕事から帰つて来た父は、座つたり立ったり、さかんに咳払いをしていました。叔父が「兄さん、鬼が出るか蛇が出るか心配だね。」と言えば、「君は気にな

らんのかね。」と父の言葉に「いや気になつてるさ、兄貴がどんな顔をするかをね。」と二人のやり取りの傍で母は心配この上もないといった顔で座っていました。

続く

(公財)海原会寄付者芳名簿

(敬称略)(単位千円)

令和二年七月九日より

- |    |      |         |     |
|----|------|---------|-----|
| 五  | 若月   | 良介(一般)  | 静岡  |
| 五  | 村木   | 良治(乙22) | 大阪府 |
| 五  | 若林   | 武美(乙13) | 富山  |
| 三〇 | 川村   | 修三(乙18) | 兵庫  |
| 五  | 土井   | 勇(乙22)  | 東京  |
| 二五 | 恵口   | 寛子(一般)  | 東京  |
| 二  | 鈴木   | 里可(一般)  | 茨城  |
| 五  | 金井   | 克己(乙10) | 神奈川 |
| 一〇 | 竹前   | 正一(乙19) | 長野  |
| 五  | 猪俣   | 武博(乙6)  | 茨城  |
| 五  | 池田   | 隆(甲12)  | 群馬  |
| 五  | 谷口   | 繁(乙20)  | 埼玉  |
| 五  | 薄衣   | 岩雄(乙23) | 埼玉  |
| 五  | 服部   | 義隆(甲16) | 神奈川 |
| 五  | 医療社団 | リョクエイカイ |     |
| 一〇 | 堀端   | 優子(一般)  | 大分  |
| 一〇 | 米倉   | 優子(乙4)  | 神奈川 |

海原会へのご芳志

誠に有難うございました。



「予科練」第48号11・12月号  
昭和53年7月26日第3種郵便物認可

令和2年11月1日発行  
(隔月奇数月1回1日発行)

発行人 菅野寛也

編集人 保坂俊雄

発行所 〒140-0013

公益財団法人 海原会  
東京都品川区南大井6-16-12  
(大森コーポビータネーズ)

郵便振替  
00140-9154332  
FAX 03-3768-1335  
定価500円

## お墓

首都圏多数の霊園・寺院墓地をご案内致します。

### 東京都・足立区 舎人浄苑

0.90㎡～

東京都より公益霊園の認証を受けた、舎人公園近くの都心でも希少な好環境の霊園。

在来仏教



### 東京都・港区 高輪メモリアルガーデン

0.45㎡～

都心の緑あふれる閑静な住宅街の霊園。環境・価格ともに大好評の立地です。

在来仏教



### 東京都・町田市 町田いずみ浄苑 フォレストパーク

0.90㎡～

緑豊かな武蔵野・横浜みなどみらいを一望し、四季折々の花が彩る好環境の霊園。

宗教不問



### 東京都・八王子市 東京霊園

3.00㎡～

四季のうつろいに永遠の時を刻む、行き届いた景観と設備の公園墓地。

宗教不問



## お葬式

家族葬から社葬まで、おまかせください。

### 花で送る家族葬



10名様用

会員価格 580,000円～(+税)

ご家族だけで、または親しい方だけで気兼ねなく送りたい。そんな想いにお応える10名様用のプランです。花祭壇は「風」と「塵」の2種類から選べます。

自社総合式場から提携斎場まで、豊富な式場をご案内できます。



- おおのやホール小平 0120-57-2222
- フューネラルリビング横浜 0120-40-0785
- 常光閣斎場(千葉) 0120-03-5005
- セレモ埼玉営業所 0120-79-8008

## お仏壇

ライフスタイルに合わせた祈りのかたちをご提供します。



海原会会員の皆様へは、墓石・葬儀(祭壇費用)・お仏壇を  
会員特別価格にてご提供させていただきます。お気軽にご相談ください。

お墓 墓所工事  
**10%割引**

お葬式 祭壇価格から  
**20%割引**

お仏壇 **25%割引**

お問合せは、海原会事務局へ ☎ **03-3768-3351**

株式会社メモリアルアートの大野屋は  
甲飛十四期生 元海軍一等飛行兵曹 大澤静雄の  
次男 大澤静可の経営する、お墓・お葬式・お  
仏壇までご利用いただける会社です。

大野屋イメージ  
キャラクター  
市田ひろみ



大野屋テレホンセンター

葬儀のご依頼(緊急ダイヤル)24時間受付

「仏事・葬儀・お墓に関するご相談 (9:00~20:00)」

標準・PHS  
OK  
通話無料

**0120-02-8888**

メモリアルアートの大野屋  
<http://www.ohnoya.co.jp>

75600  
1000017(00)

全優品  
全国優良石材店